

## (一) 佐々木校長から山中校長へ

本校の第三代校長佐々木哲郎は、昭和八年の就任以来、二十二年もの長い間その要職にあつて、学校運営に力を尽くした功労者である。戦前から戦中・戦後にまたがる激動の時代に、よく教育者としての信念をつらぬき、校風の継承と発展に大きな業績を残した。

その佐々木校長から理事長あてに、高齢のため七十一歳の誕生日を迎える昭和二十九年十月五日を期して退職したいという申し出がなされ、惜しまれながらも、その希望が入れられることになつた。そして後任の第四代校長に、教務主任山中順三の就任が決まつた。

新旧校長の告別・就任式は、十月三十日に行なわれた。勇退後、初の名譽校長の称号を贈られる佐々木校長は、壇上からつぎのような告別のあいさつを行なつた。

私は二十五歳で中学校の教壇に立ち、以来四十六年二月、壇上よりお話しするのはこれが最後であります。老齢でありますので理事長に退職希望を申し上げたところ、円満にご承諾下され、十月五日私の誕生日をもって辞任することになりました。

お別れするにあたってとくに申し上げたいのは、本校の創立者故三田義正翁の創立の趣旨についてであります。昭和二年校旗制定のさい述べられたことばであります。一言にして申す

ならば、本校設立の目的を、質実剛健の氣風にみちた学徒の養成にあると確言されたのです。

これは昭和六年第一回の卒業式にあたつてもくり返されたことなのです。私も就任以来及ばずながらこの趣旨を体してまいりましたが、故人の遺志をつがれた現理事長も着々とその実現を目指され、今や六十年の一貫教育による私学としての本校のほこりは年々高められている。諸君はこの岩中精神をよく培ってもらいたい。

山中新校長は私とともに本校に就任し、幾多の困難を常に克服してこられた先生であり、今や私は安心して引退できます。今後は新校長を中心に、さらに刷新の実をあげる事を望みます。

これに対し、生徒代表黒川元が謝辞をのべ、全校生徒の心からなる記念品を贈呈した。ついで以後の重責をになう山中新校長が立ち、大要左記の所信を明らかにした。

私のいいたいことは、佐々木名譽校長のことばにつきる。もう一つ、私は、本校は楽しい学校であつてほしいと思う。全力をつくしたのちの、高い楽しさを味わつてほしい。

最後に生徒代表金子卓嗣が誓詞を朗読し、式は厳肅そのものの雰囲気の中に幕を閉じた。そのあと、惜別の情を押えかねた全校生徒が校門前に二列の人垣をつくり、去り行く佐々木前校長の姿をいつまでも見送つた。こうして、佐々木校長の

時代から山中校長の時代へと、校史が移つて行つたのである。

山中順三新校長は、昭和八年に慶応義塾大学英文科を卒業後すぐ本校に赴任し、英語の教師として、また寄宿舎の舎監として、常に多くの生徒と接してきた。校長に就任したときはまだ四十五歳、ボードレールを論じ、佐藤春夫を激賞する学者タイプの若き指導者であつた。英国流の質実剛健の氣風を重んじ、生徒にくり返し「石桜精神」を説いた。この新校長のもとに、岩手中・高等学校は雄躍期を迎える。

## (二) 野球部、甲子園の土を踏む

本校野球部の創設は、終戦翌年の昭和二十一年であつた。復活した全国中等野球大会の県予選が行なわれることになり、それに出場しようとするの山崎・小泉らを中心集まつた同好者が野球部を結成した。この県予選では、いきなり優勝候補の盛岡中学とぶつかり、残念ながら8-0のスコアで敗れている。

その後、用具不足や練習場難などの多くの悪条件と戦いながらも、「試合に泣かずして練習に泣け」を合言葉に、年々きびしい練習を重ね、試合出場回数をふやして行つた。その結果、二十六年には夏の全国高校野球大会県予選で二位となり、奥羽大会への出場権を得た。また秋季高校野球県大会で初の優勝をとげ、東北大会では決勝まで進出して二位となつた。この年は、投手の小武方の活躍が光つていた。さらに二十七年は、春季高校

野球県大会優勝、二十八年秋季高校野球県大会優勝と、しだいに岩高野球部の名声が高まって行った。

このような諸先輩の努力が土台となって、昭和三十年の甲子園出場が実現したのである。これは単に、野球部創設十年目の快挙というだけにとどまらず、本校創立以来、もともと全校生の志気をふるい立たせたことであった。そのときのメンバーは、村川（投手）、田中（捕手・主将）、名久井（一塁）、平野（二塁）、板垣（三塁）、小泉（遊撃）、佐々木（左翼）、田口（中堅）、沢野（右翼）の諸君で、部長が戸嶋正夫、監督が川村昌司であった。

昭和三十年の三月、高田市での合宿を皮切りに野球部の春期練習が始まった。技術的な基礎訓練と、精神面での団結力強化がその主要な目標とされた。そして五月に開かれた東北六県大会盛岡予選にのぞんだが、このときは一回戦に盛岡一高と対戦し、8-3の戦績で敗退した。だが選手たちは夏の大会に希望をつなぎ、苦しい練習にはげむのだった。

野球部の最大のなやみは、球場がないことであ



第四代校長 山中順三

る。校庭は週に三日しか使うことができず、あとは市営・盛鉄・岩大の球場を借りてどうにか間に合わせた。この三球場は、一週間も前から予約しなければならぬ。三球場が使えないときは、河北小学校のすみを借りてバント練習をしたり、外の部が帰ってから校庭でバッティング練習をするという状態であった。

全国大会岩手県予選に先立ち、最後の仕上げのため、一週間の合宿に入った。練習は加賀野中学校の校庭を借り、本校寄宿舎に寝泊りした。この中学校のグラウンドはレフト方面が非常にせまく、少し大きく打つと球が田に飛び込んでしまった。だが選手たちはそんなことを苦にせず、フアイトある練習を行なった。

この合宿のころから、田中、村川、板垣、田口、小泉などの諸選手が、本来の当りをとりもどしてきた。そして、調子が上向きになったときに、全国高校野球選手権大会の岩手県予選を迎えた。一関二高、黒沢尻北高、花巻北高をそれぞれ破り、奥羽大会への出場権を獲得した。こうなると、試合がそのまま練習の役割を果たし、チームは尻上がりに好調となった。準決勝で一戸高を14-9と

しりぞけ、決勝では優勝候補の宮古高を相手に回して、2-0で勝った。みごと県優勝をなしとげたのである。

続く奥羽大会は、県大会の一週間後の七月三十一日から、盛岡市営球場で開始された。本校選手は岩手県の名譽にかけて、学生として恥じない戦いをする覚悟でのぞんだ。一回戦の準々決勝の相手は、実力本大会随一と評されていた秋田高だったが、岩手高ナインはよく石桜精神の真価を発揮し、4-0で完勝を収めた。二回戦の準決勝は、県大会で顔を合わせた一戸高とふたたび対戦し、4-0でこれを降した。そして、ついに奥羽大会の決勝戦に進出し、強豪の八戸高を5-3で破って、念願の甲子園への道を開いた。この予想外の結果に、本校関係者はもちろん、盛岡市民もわきにわいた。オープンカーのパレードに、天から紙吹雪が舞った。

奥羽大会での優勝の喜びをじっくり味わうひまもなく、八月五日に盛岡を出発した選手たちは、七日に甲子園の土を踏んで初練習を行なった。翌八日には、一回戦の相手が神奈川代表の法政二高と決まった。そして、八月十日の開会式がやってきた。新宮高に続いて十七番目に入場した本校選手の顔は、誇らかな表情で輝いていた。入場式が終り、第一試合の静岡高対城東高戦が行なわれたあと、いよいよ岩手高対法政二高の対戦となった。新聞は、七分三分で岩高が負けると予想を報じていたが、不利な予想をくつがえして勝つというのが県予選以来のならわしになっていたので、選手たちは少しも動じなかった。本校勢は元気いっぱい

*Fight it out!*  
Iamanaka

山中校長はよくこうした英文を生徒に与えた

# 岩手高校 必勝

大会 岩手県人会

郷党挙げての応援



第1試合対法政二高戦大観衆を前に熱戦3-0で快勝



第1試合を勝ちぬぎ、第2試合坂出商と対戦前の握手(左、田中主将)

いで試合にのぞみ、一回裏に先取点をあげ、三回と五回にも得点を重ねて三点とした。これに對して法政の打撃は振わず、3-0で岩高のシャットアウト勝ちとなった。勝因は、村川の好投と田中の闘志、板垣の好打、さらに好走好守の内外野守備陣が一丸となって、強敵にぶつかったことにある。こうして岩高は二回戦に進み、北四国代表の坂出商高と対戦することになった。

大会五日目の八月十四日、その岩手高対坂出商高の熱戦がくり広げられた。本校は五回、小泉のレフト前ヒットを生かし、村川のショート右を抜くヒットによって一点を入れ同点としたが、七回致命的な二点を奪われ、善戦むなしく3-1で敗退した。選手たちの目に、くやし涙が光る。しかし、だれが彼らを責め得ようか。晴れの甲子園大会に出て、一回戦を勝ち進んだというそのことだけで、すでに校史に不滅の金字塔をうちたてたのである。

岩手高校野球部の甲子園出場に關連して、ぜひふれておかなければならないのは、選手たちの活躍を物心両面から支えた多くの関係者たちの、みごとに協力ぶりである。まず三田理事長は、遠征資金として二十万円の私財を寄せ、岩高チームを勵ました。また石桜同窓会も寄付を集め、金銭的精神的に母校野球部を盛り立てた。ことにも、当時同窓会副会長だった栃内松四郎の奮闘ぶりはめざましく、募金のあと選手たちとともに甲子園入りをし、何くれと世話をするほどの熱の入れようであった。石桜同窓会そのものとしても、母校野球部の快挙を全面的に応援したのが、最初の大事

業だったといえる。

こうして、母校関係者のすべてが、かつてないほど緊密に結集した。さらに盛岡市民や岩手県民も、岩高チームの健闘をたたえた。岩手に岩手高校ありと天下に知れ渡ったのであるから、だれもが母校に限りない誇りを抱いた。まさに石桜精神の開花であり、雄躍期を端的に象徴するできごとであった。あのときの精神的な高まりを、われわれは、いつまでも大切にしたいものである。

野球部の甲子園出場に關しては、後日談も豊富である。大宮市在住のある画家から、油絵「花と少女」や色紙を贈られたのもその一つだった。フジバヤシ・サイカンというこの画家は高校野球の熱烈なファンで、毎年心を打たれた出場校に作品を寄贈することになっているのだ。昭和三十年の甲子園出場校の中では、岩手高校と熊本高校の健闘ぶりに感動したという。画伯からの手紙に、つぎのようなくだりがある。

〔前略〕 岩手高校には立派な品格がありましたので動かされました。(中略) 勝つ負けるは別です。甲子園へ出てくるもの二十三、ことごとく紙一重のちがいです。運不運によってキマル勝負です。勝つても負けても同じことです。人間のイノチの光りあるのみです。岩手、熊本、新庄、芦別、四日市などなら、ボク一生ついてゆかれると思う学校です。校風です。(後略) 〕

サイカン画伯から贈られた油絵「花と少女」はいまも校長室の壁を飾り、岩高チームの活躍を思い起こすよすがになっている。